島根大学医学部紀要，第44巻，27～33頁，2022年３月

実 践 報 告

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策を講じた臨地実習を経験した看護学生の認識調査

（新型コロナウイルス感染症／臨地実習／看護学生）

佐藤亜美[1)]・大國　慧[1)]・坂根可奈子[2)]・福岡理英[3)]・秋鹿都子[1)]・榊原　文[3)]
松浦志保[1)]・永井真寿美[1)]・福間美紀[1)]

Awareness Survey of Nursing Students Who Experienced Clinical Training With the Prevention of COVID-19

（COVID-19 infection/clinical training/nursing student）

Ami SATO[1)], Kei OGUNI[1)], Kanako SAKANE[2)], Rie FUKUOKA[3)], Satoko AIKA[1)], Aya SAKAKIHARA[3)], Shiho MATSUURA[1)], Masumi NAGAI[1)], Miki FUKUMA[1)]

【要旨】新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策を講じた臨地実習における課題の把握と改善策の検討を目的に、2020年度にB病院で実習を経験したA看護系大学２・３年生にWeb認識調査を行った。調査の結果53部の有効回答を得た。学生は「各実習科目に必要な技術の習得」「電子カルテ閲覧」に困難を認識していた。２年は３年に比べ「学内の演習」に困難感があり、「外出や他者との接触」「会食・飲み会の自粛」に注意したと認識していた。その他、習得すべき内容への影響や実習内容・方法の変更に伴う困難の認識は低く、対策を講じた中でも実習方法や内容に多くの困難感は生じていなかった。COVID-19対策による演習と実習の統合の課題について、感染状況の影響を受けない教育方法を取り入れる必要性が示唆された。学内での電子カルテ閲覧は課題があり、臨床指導者と共に対策を検討する必要性が示唆された。

Ⅰ．緒　　言

近年、複雑多様化する社会の要請を背景に、看護職にはチーム医療や多職種連携の一員としての役割、看護の専門性の発揮など、質の高い看護実践能力が求められている。そのため、2018年には看護学士課程教育におけるコアコンピテンシー[1)]と卒業時到達目標が提示され、講義・演習・実習を効果的に組み合わせて、知識と実践を効率的に統合させ、深化・発展させていくことが求められている。

看護学教育モデル・コア・カリキュラム[2)]において、臨地実習は、学生が看護職者の行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行うことで、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図り、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠で最も重要な教授方法であると位置付けられている。しかし、2020年度の看護系大学における臨地実習は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）拡大の影響を受け、その多くが中止や時間短縮、学内演習への変更を余儀なくされた[3)]。本学の臨地実習においても、学生に行動歴や健康管理表の記録を求め、実習直前の体温測定を実施するなど感染対策強化を図り、病棟でのカルテ閲覧制限や、一部看護ケアの実施・見学を中止する等、多くの制約と変更を加えることとなった。日本看護系大学評議会による全国の看護系大学の教員を対象とした2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査[3)]によると、実習の短縮や中止により、臨床で患者や実習指導者と直接関わる機会の減少に伴う学習環境の変化や、医療者として身に着けるべき

[1)] 島根大学医学部臨床看護学講座
Department of Clinical Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University
[2)] 島根大学医学部基礎看護学講座
Department of Fundamental Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University
[3)] 島根大学医学部地域・老年看護学講座
Department of Community Health and Gerontological Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University

人間関係の形成への課題、実習内容の変更により看護技術の獲得といった学習内容に課題があることが指摘されている。一方、COVID-19対策を講じた実習体制による影響について、学生が実習内容の変更や実習環境などについてどのように捉えているのか、学生を対象に調査した結果は報告されていない。

COVID-19対策を講じた新たな実習体制における課題の把握と改善策の検討を行うことは、Withコロナ、Postコロナにおける臨地実習の体制づくりに活かすことができると考える。また、A看護系大学の２年生と３年生が、同じCOVID-19対策を講じた実習体制の元、B病院で実習を行ったため、学年間での認識の差を明らかにし、学年ごとの事前準備や教育的介入の工夫の必要性があるかについて検討する。

Ⅱ．研究目的

B病院におけるCOVID-19対策を講じた臨地実習に関するA看護系大学の看護学生の認識を明らかにし，課題の把握と改善策を検討することを目的とした。

また２年生と３年生での学年間の認識の差を明らかにし、学年ごとの事前準備や教育的介入の工夫について検討する

Ⅲ．調査方法

１．対象者

調査対象者は、2020年度にB病院でCOVID-19対策を講じた臨地実習を経験したA看護系大学の２年生59名と３年生56名の計115名である。

２年生は基礎看護学実習Ⅱを2021年２月に２週間経験した。３年生は例年９月～３月までの７か月間で行う科目別実習を、2020年９月～2021年１月の５か月間に短縮したスケジュールで経験した。この間、３年生は感染拡大の影響により、約２週間の中断を経験した。

2020年度は、学内で行う演習科目の一部また全てをオンライン授業に切り替えたため、２年生は日常生活援助技術を中心とした看護技術演習の実施機会が大幅に減り、３年生は科目別実習前の模擬患者による課題演習が中止となった。

２．調査内容

調査項目は、COVID-19対策を講じた臨地実習に対する学生の認識を問う自作の22項目で、「看護学生が認識した実習で習得すべき内容に対するCOVID-19による影響」４項目、「感染症対策に伴う実習内容・方法の変更による困難」９項目、「感染症対策に伴う実習環境の支障」３項目、「実習期間中の体調管理」６項目とした。「全く：１点」から「とても：４点」の４件法で、得点が高いほど影響や困難、支障があり、注意したことを示す。

３．2020年度の臨地実習における変更点

2020年度におけるA看護系大学における臨地実習は、B病院と協議を行い、以下のCOVID-19対策を講じて実施した。

１）実習開始２週間前からの行動制限と健康管理、実習日の健康観察を行い、感染兆候がある等した学生については実習を停止し、補完実習を行った。
２）実習中のサージカルマスク着用と手指消毒の励行
３）病棟ステーション内での３密の回避のための方策として、カンファレンス等への参加の取りやめ、電子カルテ閲覧の禁止、学生カンファレンスを学内で実施
４）院内での電子カルテの閲覧禁止を補完するため学内に院内スペースを設け、電子カルテ閲覧を可能とした
５）エアロゾル発生リスクのあるケアの実施及び見学の中止
６）３年次の科目別実習期間の短縮
７）各科目別実習の一部を学内実習へ切り替え

尚、６）７）以外の変更点は2年生3年生ともに共通の内容であった。

４．調査期間

当該年度の病院での臨地実習がすべて終了した2021年３月

５．データ収集方法

アンケートはMicrosoft Office 365のFormsの機能を用いて、氏名やメールアドレス等の個人情報を含まないよう設定し作成した。対象となる学生へすべての実習終了後に、学内学習環境システム（Moodle）を介してURLを提示し回答を得た。

６．分析方法

データ解析は統計ソフトSPSSver.27 を用いた。記述統計を算出後、２年生と３年生の２群間で、COVID-19対策を講じた臨地実習に対する認識の比較をMann-WhitneyのU検定により実施した。有意水準は５％とした。

７．倫理的配慮

調査対象者に、調査目的、方法、プライバシーへの配慮、研究参加への自由意思、調査協力の任意性、個人情

報の匿名化、いつでも質問に応じること、成績評価には影響がないこと、調査結果の公表、収集したデータはパスワード付きUSBを用いて管理し、公表の10年後にUSB内のデータを確実に削除することについて説明文を提示した。Web調査への回答後は撤回できないことについても説明文にて提示し、調査に回答することで同意が得られたと判断した。

さらに、Microsoft formsのシステムはHIPAA（健康保険の携行性と責任に関する法律）とBAA（ビジネスアソシエイト契約）、FERPA（家族教育の権利とプライバシー法）を遵守し、保存時と転送時は暗号化されており、データが第三者に提供されることはない。

Ⅳ．結　　果

１．調査対象者の背景

回答者は53名（回収率46%）で、内訳は２年生が30名（回収数の56%）、３年生が23名（回収数の43.3%）であった。各学年の臨地実習内容と期間は、２年生が基礎看護学実習Ⅱで２週間、３年生が成人Ⅰ、Ⅱ・老年Ⅰ・精神・小児・母性看護学実習で15週間、B病院で行われた。

２．看護学生が認識した実習で習得すべき内容に対するCOVID-19による影響

「各実習科目に必要な技術（看護技術など）の習得」については、全体の６割の学生が、やや影響があった、かなり影響があったと回答しており、影響を認識した学生の割合が高かった。その他の項目については、全く影響はなかった、あまり影響はなかったとの回答が７割以上を占め、影響を認識していない学生の割合が高かった（図１）。

２年生と３年生の２群で比較したMann-WhitneyのU検定の結果を表に示す。３年生より２年生の方が「各実習科目に必要な技術（看護技術など）の習得」に影響があったと有意に認識していた（表）。

３．COVID-19対策に伴う実習内容・方法の変更による困難

ほとんどの項目において、全く困らなかった、あまり困らなかったとの回答が８割以上であり、COVID-19対策に伴う実習内容・方法の変更について困難を認識していない学生の割合が高かった。「電子カルテ閲覧」については6割にとどまった（図２）。

２年生と３年生の比較（以下、学年間の比較）では、「学内演習」について、３年生より２年生の方が、有意に困難を認識していた。（表）。

４．実習環境の支障

実習環境の支障については、すべての項目において、全く支障はなかった、あまり支障なかったと回答したものが８割以上であった。

５．実習期間中の体調管理

実習期間中の体調管理については、全員がすべての項目で、やや注意した、とても注意したと回答した。（図３）

学年間の比較では「外出や他者との接触」と「会食・飲み会の自粛」について有意な差があり、いずれも３年生に比べ２年生の方が注意したと認識していた（表）。

６．感染対策グッズの確保

感染対策グッズの確保については、すべての項目において、全く困らなかった、あまり困らかなかったと回答した者が８割以上であった。

２年生と３年生の比較では有意な差は認められなかった（表）。

７．コロナ禍での実習を経験して得たこと

「実習に対するモチベーションが高まった」について

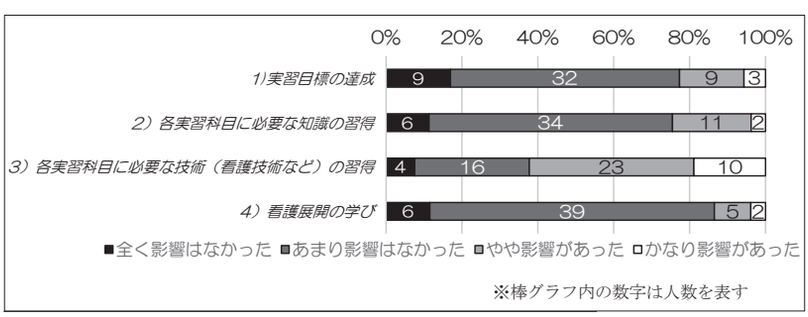

図１　COVID－19対策による習得できた内容への影響

表　看護師の役割の違いによる実習指導実施状況・実習指導に関する認識の比較

	2年(n = 30)	3年(n = 23)	2年・3年 Mann-Whiteney	
	M ± SD	M ± SD	p値	
看護学生が認識した実習で習得すべき内容に対するCOVID-19による影響				
1）実習目標の達成	2.00 ± 0.816	2.04 ± 0.562	0.775	
2）各実習科目に必要な知識の習得	2.16 ± 0.688	2.00 ± 0.522	0.124	
3）各実習科目に必要な技術（看護技術など）の習得	2.92 ± 0.812	2.43 ± 0.843	0.027	*
4）看護展開の学び	2.04 ± 0.611	1.96 ± 0.475	0.395	
感染症対策に伴う実習内容・方法の変更による困難				
1）事前学習	2.20 ± 0.645	2.00 ± 0.522	0.153	
2）学内演習	2.52 ± 0.714	1.87 ± 0.344	0.000	*
3）臨地（病棟や施設など）における受け持ち患者（対象者）への看護経験	2.12 ± 2.00	2.09 ± 0.515	0.663	
4）臨地（病棟や施設など）でのシャドウ・見学	1.84 ± 0.746	2.04 ± 0.562	0.206	
5）看護過程の展開	2.04 ± 0.735	2.04 ± 0.367	0.795	
6）カンファレンス	2.00 ± 0.707	1.91 ± 0.417	0.313	
7）電子カルテ閲覧	2.48 ± 0.714	2.35 ± 0.832	0.241	
8）実習記録の作成・提出	2.00 ± 0.707	2.09 ± 0.596	0.862	
9）実習スケジュール（実習期間、1日当たりの実習時間等）	1.72 ± 0.542	2.04 ± 0.638	0.224	
感染症対策に伴う実習環境の支障				
1）実習病棟内の学生待機場所	1.68 ± 0.748	1.78 ± 0.518	0.524	
2）更衣や休憩を行うスペース	1.64 ± 0.700	2.00 ± 0.603	0.285	
3）カンファレンス場所	1.48 ± 0.586	1.78 ± 0.422	0.212	
実習期間中の体調管理				
1）日々の健康観察（検温、症状チェック）	3.84 ± 0.374	3.78 ± 0.422	0.424	
2）マスクの装着	3.88 ± 0.332	4.00 ± 0.000	0.122	
3）流水による手洗い・手指消毒	3.92 ± 0.277	4.00 ± 0.000	0.211	
4）外出や他者との接触	3.88 ± 0.332	3.65 ± 0.487	0.046	*
5）密閉・密集・密接など、休業要請の対象となるような施設でのアルバイト自粛	3.96 ± 0.200	3.83 ± 0.388	0.086	
6）会食・飲み会の自粛	4.00 ± 0.000	3.83 ± 0.388	0.019	*
実習期間中の感染対策グッズの確保				
1）マスクの入手	1.56 ± 0.768	1.74 ± 0.619	0.146	
2）消毒薬の入手	1.52 ± 0.770	1.70 ± 0.559	0.139	
3）体温計の入手	1.28 ± 0.542	1.48 ± 0.665	0.358	
コロナ禍での実習を経験して得たこと				
1）臨地で学ぶ大切さや有難さを実感した	3.60 ± 0.577	3.52 ± 0.593	0.459	
2）実習に対するモチベーションが高まった	3.04 ± 0.676	2.83 ± 0.778	0.434	
3）感染症対策に関する知識・技術が定着した	3.44 ± 0.507	3.30 ± 0.559	0.797	
4）感染症対策を行う意味や重要性を実感した	3.84 ± 0.374	3.52 ± 0.593	0.059	

*有意水準　$p < 0.05$

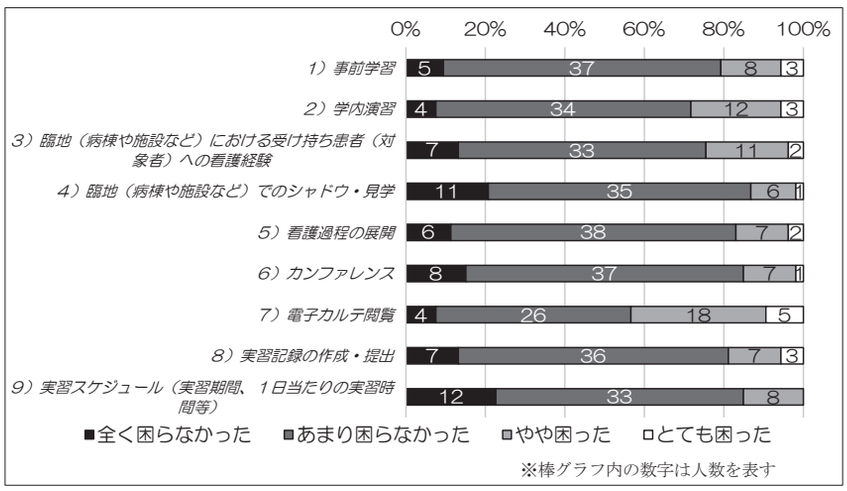

図２　COVID－19対策に伴う実習内容・方法の変更による困難

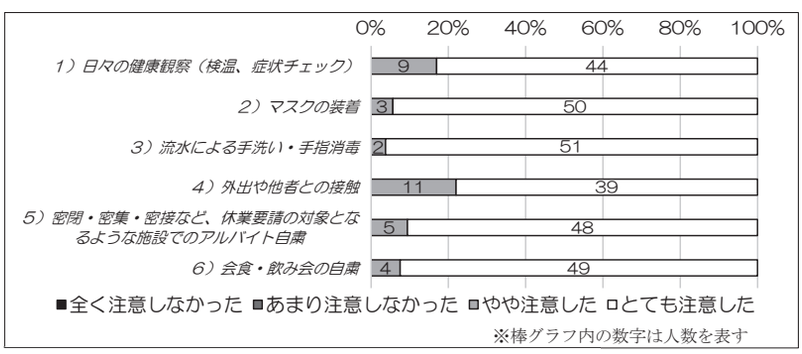

図３　実習期間中の体調管理

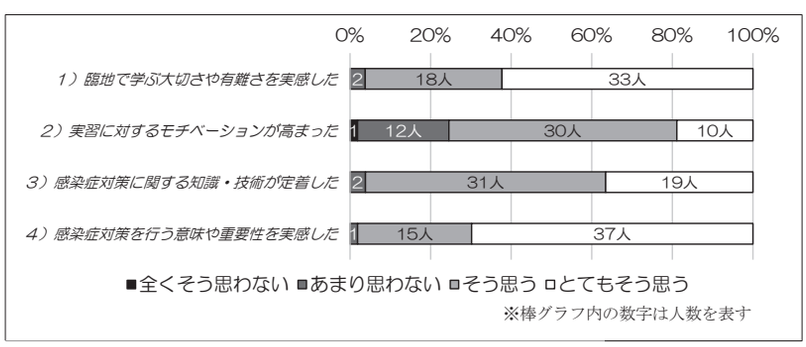

図４　コロナ禍での実習を経験して得たこと

は、８割弱の学生が、そう思う、とてもそう思うと回答した。一方、約２割強の学生がモチベーションの高まりについて、あまりそう思わない、そう思わないと回答していた。それ以外の項目については、そう思う、とてもそう思うと回答したものが9割以上であった（図４）。

学年間の認識に有意差は認められなかった（表）。

Ⅴ．考　　察

１．COVID-19 対策を講じた臨地実習における学生への影響と課題

学生は、「各実習科目に必要な技術の習得」に影響があったと認識していた。これは、日本看護系大学協議会が報告している教員側の認識[3]と一致している。文部科学省は、臨床実習の場で専門職者としての役割モデルである看護職の看護実践に触れることは最良の教育であり、看護実践能力の育成のためには、実習の場での知識と技術の統合は不可欠であるとしている[4]。技術の習得においては、まずは学内で臨床をイメージしながら繰り返し練習を行い、基礎的な知識と技術を習得する必要が

ある。学内で身に着けた技術や学びを踏まえ、実習においてロールモデルである看護職者の実践に触れ、学生自らも看護実践を経験することで看護実践能力は育成されていく[5, 6]。しかし、COVID-19対策のため、事前の学内演習が例年に比べ大幅に減少したことや、実習中の一部ケア実施の中止や見学の中止により、看護職の実践に直接触れる機会が少なくなったことから、学生は各実習科目に必要な技術の習得に影響があったと認識したと考えられる。

「電子カルテの閲覧」に関する困難は、両学年ともに得点が高く困難を認識していた。病棟ステーションでのカルテ閲覧に制限があり、学生がタイムリーに電子カルテからの情報収集ができなかったことが困難感につながった一因であると考えられる。院外で電子カルテ閲覧する機会を設けたものの、閲覧時間には制限があり必要な情報を効率よく得ることは難しかったと推察される。しかし、感染症対策に伴う実習内容・方法の変更による困難の他の項目については、困らなかったと回答した学生の割合が高かったことから、実習内容・方法に対する学生の困難感はあまり生じていなかったと考えられる。また、コロナ禍で実習を経験して得たこととして、多くの学生が臨地で学ぶ重要性や有難さを実感した、感染症対策に関する知識や技術が定着した、感染症対策を行う意味や重要性を実感したと認識しており、COVID-19対策を講じた中での臨地実習を前向きに捉えていたと考える。ただし、実習に対するモチベーションについては２割強の学生が高まったと感じていないことから、COVID-19による影響を精査する必要がある。

２．学年間の比較と学年ごとの課題

B病院での実習を行った２年生と３年生の学年間比較から、２年生は３年生に比べ「学内演習」についての困難感があった。２年生の基礎看護学実習Ⅱに向けてその関連科目である看護技術演習がCOVID-19の影響により制限され、技術習得の機会が減少したことが困難感につながった要因の一つであると考えられる。

実習期間中の体調管理については、両学年ともに注意はしていたが、３年生は、実習期間が長いこと、実習期間中のインターバルや年末年始の休みがあることにより、感染対策行動への意識の持続が難しく、２年生と比べて認識が低くなったのではないかと考える。医療職として個人の体調管理や感染対策行動は当然の責務であり、長期間の実習に臨む学生が期間中継続できるよう、教育を工夫していく必要があると考える。

３．感染拡大下における臨地実習について

学内演習は看護技術を習得する上で必要不可欠なものであり、臨地実習の場における患者への実施の事前準備として重要であるとされている[7]。一方で、すべての看護技術を演習することは難しく、演習を行わない看護技術はビデオ教材などを活用した学習環境の整備を行い、学生が主体的に学習できるようにする必要があるとされている[8]。このことからも、感染拡大の状況を踏まえた上で、できうる限りの学内演習の実施や、臨地実習を通して行う看護技術教育、いわゆるOn-the-Job Trainingが経験不足を補う上で必要となる。今後も、感染拡大状況によっては、講義、演習、実習の内容及び方法はフレキシブルに対応する必要がある。学内におけるシミュレーション教育だけでなく、VRを活用して臨地で経験すべき内容を学内で疑似体験できるような教育方法の活用など、感染状況の影響を受けない教育方法を取り入れていく必要性が示唆された。

電子カルテの閲覧については、学生が電子カルテの画面選択に困難感があるということからも[9]、時間制限がある中で情報収集することは困難であったと推察する。学内での電子カルテ閲覧は、タイムリーに行うことができないという課題もあることから、実習指導者の協力を得ながら、報告の機会を通して学生との情報共有を行うなどの対策が必要であると考える。また、学生の電子カルテ閲覧には課題があることから、画面展開を用いた電子カルテ操作のオリエンテーションだけでなく、画面展開から情報の収集過程も含めた実践的なオリエンテーションの必要性が示唆された。

４．本調査の限界

本調査は、A看護系大学の看護学生のCOVID-19対策を講じた臨地実習に関する認識と実習指導における今後の課題について報告するものであり、１施設のデータであるため一般化はできない

Ⅴ．結　　論

B病院でのCOVID-19対策を講じた臨地実習を経験した看護学生に認識調査を行った結果、学生は「各実習科目に必要な技術（看護技術など）の習得」に影響を感じ、「電子カルテ閲覧」に困難を認識していた。また、２年生は３年生に比べ「学内の演習」に困難を認識し、「外出や他者との接触」と「会食・飲み会の自粛」について注意したと認識していた。習得すべき内容への影響や実習内容・方法の変更に伴う困難の認識は低く、対策を講じた中でも実習方法や内容に多くの困難感は生じていなかった。COVID-19による演習と実習の統合の課題と、

感染状況の影響を受けない教育方法を取り入れていく必要性が示唆された。学内での電子カルテ閲覧はタイムリーに行えないという課題があり、実習指導者と共に対策を検討する必要性が示唆された。また、学生の電子カルテ閲覧に課題があり、情報の収集の過程も含めた実践的なオリエンテーションの必要性が示唆された。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

文　献

1）日本看護系大学協議会 . 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標 . https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf.（アクセス日2021.8.2）

2）文部科学省 . 看護学教育モデル･コア･カリキュラム . https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf.（掲載日2017.10.31, アクセス日2021.7.21）.

3）日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 . 2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査 : A 調査・B 調査報告書 . https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf.（掲載日2021.4, アクセス日2021.7.29）.

4）文部科学省 . 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて : 看護学教育の在り方に関する検討会報告 . http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm（掲載日2002.3.26, アクセス日2021.10.28）.

5）佐居由美，大久保暢子，石本亜希子 , 他 . 看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み . 聖路加看護大学紀要 2008;34:70-8.

6）石渡智恵美 . 周手術期看護実習における看護実践能力育成方法の検討 : シャドーイング実習での学びと今後の課題 . 帝京科学大学総合教育センター紀要 : 総合学術研究 2020;3:63-70. doi: info:doi/10.18881/00000726.

7）厚生労働省 . 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書 . https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html.（掲載日2003.3.17, アクセス日2021.8.1）.

8）青木光子 , 岡田ルリ子 , 関谷由香里 , 他 . 基礎看護学実習における看護技術実施時の学生の困難と対処方法 . 愛媛県立医療技術大学紀要 2008;5:57-64.

9）土井英子 , 山本智恵子 , 杉本幸枝 , 他 . 電子カルテ教育システムにおける看護学生の自己評価 : 教材開発から５年を経過して . 新見公立大学紀要 2013;34:21-5.

（受付　2021年８月18日）